

8

平城京

へいじょうきょう

奈良時代

平城京



時代

奈良時代

場所

奈良県奈良市二条大路南 3 丁目 3-30

唐と新羅が再編成した東アジアで、日本が生き残るためには、強力な政府を建設する必要があった。政府は先進国の唐帝国を手本にして国を統治する律令制度を導入し、仏教の国教化を促進してゆく。飛鳥浄御原宮・難波京・藤原京と都市建設の実験を繰り返しながら、710（和銅 3）年 3 月、平城に遷都して都が完備された。国土の中心に天皇の政府が所在する都城を営み、地方には政府の意志を代行する国府をおき、その傘下に郡・郷・里を配置するという、壮大な構想であった。聖武天皇は天平 12 年（740）～天平 17 年（745）まで都を転々と移すが、天平 17 年～延暦 3 年（784）、再び平城京を都としている。

平城京は朱雀大路をはさんで西側を右京、東側を左京という。条坊地割りによって区画された。朱雀大路の南端には羅城門、北端には朱雀門があり、朱雀門より中は 1 km 四方の平城宮となる。大極殿、朝堂院、天皇の住まいである内裏、役所、庭園がある。奈良時代前半、大極殿は朱雀門の真北にあった。しかし後半には、東側に第二次大極殿が建てられている。

平城京の一部建物は平安京への遷都後も長く継続し、官立の大寺である東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・法華寺・西大寺・唐招提寺・薬師寺などは移っていない。平安遷都後もこれらの寺院は奈良を南都と称し平安京政権の精神的な支えとなり、宗教的な都市となった。



平城京跡 石碑



平城京 位置関係



朱雀門 正面



朱雀門 軒裏



大極殿 正面



大極殿 看板

9

唐招提寺 講堂

とうしょうだいじ こうどう

奈良時代

唐招提寺 講堂



時代

奈良時代

場所

奈良県奈良市五条町 13-46

唐招提寺は天平宝字 3 年（759）、唐の高僧鑑真^{かんじん}大和上によって創建された。飛鳥時代に仏教が伝来して以来、戒律は概念として知られながらも、さほど重視されていなかった。奈良時代に入り、その重要性が知られ始めたが、日本には授戒を行える僧侶がおらず、授戒の体制整備が急がれた。鑑真和上は朱鳥 2 年（688）、中国揚州で誕生、14 歳の時、揚州の大雲寺で出家。21 歳で長安実相寺の戒壇で弘景律師に授戒を受けたのち、揚州大明寺で広く戒律を講義し、長安・洛陽に並ぶ者のない律匠と称えられていた。

そこで興福寺の栄叡^{ようえい}と普照^{ふしょう}が唐へと渡り、南山律宗の継承者である鑑真に、伝戒師としての来日を要請。鑑真は聖武天皇の願いに応じて来朝を決意、5 度の渡航失敗の後、来日決意より 10 年後の天平勝宝 5 年（753 年）、65 歳でついに九州へと上陸を果たす。鑑真は 5 年間東大寺に座し、天皇や僧侶 400 人に戒律を授け、天平宝字 3 年（759 年）、戒律を学ぶ為の道場である唐招提寺を開いた。律宗総本山としてその法灯を今に伝える。

国宝金堂の背後には、教義を説く為の講堂が建てられている。この講堂は、平城宮の東朝集殿^{ちようしゆう}（儀式に出席する臣下の控え室）であったものを、平城宮改修の際に下賜され、天平宝字 4 年（760 年）頃に唐招提寺へ移築したものである。大幅な改修が施されているが、平城宮の唯一現存する宮廷建築として非常に貴重である。



唐招提寺 石碑



唐招提寺 講堂（国宝）



唐招提寺 金堂（国宝）



金堂 鴟尾



金堂 吹き放し



鼓楼（国宝）

10

朱雀門

すざくもん

奈良時代

朱雀門



時代

奈良時代

場所

奈良県奈良市二条大路南 3 丁目 3-30

7世紀にできたとされる古代の街道「下ツ道」^{しもつみち}は、藤原京からまっすぐ北にのびて平城京^{せいめい}の正門である羅城門^{らじょうもん}につきあたる。羅城門をくぐると、幅 75m もの朱雀大路がまっすぐ北へのびていた。街路樹として柳の木が植えられていたといい、羅城門から 4km 先には平城宮の正門である朱雀門がそびえ建つ。

朱雀門の左右には高さ 6m の築地塀^{ついでい}がめぐり、約 1km 四方の広さ、130ha の広さをもつ平城宮を取り囲んでいた。朱雀門の前では新羅や唐^{しんら}といった外国使節の送迎、都の男女があつまって、恋の歌をかけあうのを天皇がみるというイベントもここで行なわれた。元日^{えんじ}には儀式があり、天皇が朱雀門まで出向き、新年のお祝いをするこもあった。朱雀門は衛士によって守られ、いつもは開いていなかった。平城宮 12 の門のうち、最も重要な門であった。

朱雀門の位置と規模は、1964 年度の発掘調査で初めて確認された。その後も調査が続けられ、1989 年度には復原整備を控えて、全面の再発掘が行なわれた。

明らかになった朱雀門は、柱と柱の間の中心間距離がいずれも 17 尺（約 5m）で、正面 5 間（約 25m）、奥行 2 間（約 10m）の規模をもつ。平成 10 年度に復元建物が竣工した。



朱雀門 正面



朱雀門 左の軒裏



朱雀門 右下から



朱雀門 右の軒裏



朱雀門



朱雀門

11

大極殿東高殿

だいくでんひがしたかの

奈良時代

大極殿東塔



時代

奈良時代

場所

奈良県奈良市佐紀町

大極殿^{だいくでん}は古代の宮都における中心施設で、元日朝賀^{ちようが}や天皇の即位など、国家儀式の際に天皇が出御する場所である。平城宮^{ながおかきやう}には、造営当初から恭仁京へ遷都^{くにかきやう}するまでの大極殿（第1次大極殿）と、平城京に遷都してから長岡京に遷都するまでの大極殿（第2次大極殿）の2つの大極殿が確認されている。

第1次大極殿院は、南北約320m、東西約180mの区画で、北側を1段高くし極殿^{こうでん}と後殿^{こうでん}を南北に配置している。壇の南側は儀式の際に貴族が整列した広場である。これは、唐長安城大明宮含元殿^{とうちやうあんじやうだいめいきやうがんげんでん}にならって造られたと考えられている。周囲は築地回廊で囲まれ、南面には南門とその東西に楼閣を構えていた。平城遷都1300年にあたる平成22年（2010）、大極殿の建物が復元され、現在公開されている。

この東側の楼閣を建てるにあたって飛驒匠が携わっていたことが木簡によって分かった。木簡の出土場所は平城宮中央区朝堂院東北隅で、内容は「造東高殿□飛驒工□」とある。東高殿は大極殿に取りつく回廊の南面、東側の楼閣のことである。現在、さらに楼閣建物の復元工事が長期計画で進められている。

第1次大極殿の建物は、恭仁京遷都の際に回廊と共に解体され、移築された。その後、恭仁宮大極殿^{やましきこうぐんじ}は山城国分寺に施入されている。



大極殿 全体像



大極殿 看板



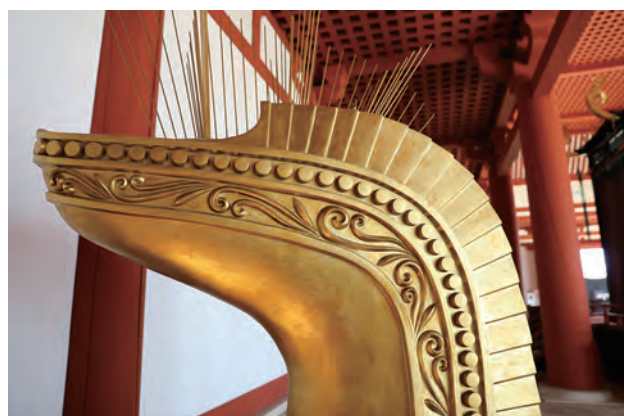
大極殿 横から



大極殿



大極殿 内部



大極殿 鴿尾

12

西隆寺

さいりゅうじ

奈良時代

西隆寺



時代

奈良時代

場所

奈良県奈良市西大寺東町2丁目1

さいりゅうじ 西隆寺は、奈良時代に平城京に造営された尼寺。称徳天皇の発願によって神護景雲元年（766年）に造寺司（造西隆寺司）が設置され、西大寺そばの右京一条二坊の地4町に建立された。

創建当時は官寺として他の諸大寺と同様の扱いを受けた。桓武天皇も封戸を施入するなど厚い保護を受けていたが、次第に衰退し、元慶4年（880年）には西大寺の管下に入った。鎌倉時代には廃寺となった。

昭和46年（1971年）に発掘調査が実施され、金堂や塔などの跡が確認された。飛騨匠が工事に参加していたことを示す木簡が出土している。西隆寺東門地区から出土し、その内容は「--- 斐太工三人〇豊岡／宿奈万呂 ---」である。

巨大商業施設『ならファミリー』店舗内通路に、西隆寺の柱位置が床に表示されていて興味深い。南大門の北には楼門型中門、金堂、講堂が一直線に並び、南大門北東に三重塔が建ち、さらに廻廊が左右に廻って講堂に取り付く。東寺に似た伽藍配置であった。寺域は東西、南北いずれも約250mを占めている。



西隆寺跡



西隆寺跡



西隆寺塔跡



西隆寺塔跡 木碑



西隆寺跡周辺



ならファミリー 正面

13

西大寺

さいだいじ

奈良時代

西大寺



時代

奈良時代

場所

奈良県奈良市西大寺芝町1丁目1-5

西大寺は、奈良時代天平神護元年（765）に創建された。官大寺を総称する「南都七大寺」の1つに数えられ、2015年に創建1250年を迎えた。奈良時代、聖武天皇・光明皇后の後を継いだ娘帝の称徳天皇が「常騰を開基として鎮護国家」の思いを込めて開創し、東大寺などと並び称される寺格を誇っている。当時は広大な寺域に多数の堂塔が建ち並び、東大寺と共に栄えていたが、承和13年（846）以後数多の火災にあい、創建当時の建物はほとんど焼失した。

天平神護元年、飛騨国大野郡大領の飛騨国造高市麻呂が造西大寺大判官に任命されている。高市麻呂は天平勝宝元年（749）、飛騨国分寺に知識物を献じたことで外正七位下から外従五位下に叙せられた人物で、西大寺に大野郡の墾田を寄進している。西大寺の造営には高市麻呂のもと、高市麻呂の故郷の飛騨匠が動員されたことであろう。

中世・鎌倉時代には、稀代の高僧・叡尊^{えいそん}が出て、密教において戒律を重視した教え（後の“真言律”）を広め、「興法利生^{こうぼうりしやう}」をスローガンに独自の宗教活動を推進している鎌倉時代に叡尊により復興されたが、戦国時代には再び火災で焼失した。現在残っている本堂（重文）、愛染堂（重文）、四王堂（重文）などは江戸時代中期に建てられたもの。叡尊が始めた「大茶盛」の寺としても有名である。現在の寺域は約1万坪と広い。



西大寺 東門



本堂へと続く道



本堂（国指定重要文化財）と東塔跡



東塔跡



東塔跡 看板



本堂

14

飛驒国分寺

ひだこくぶんじ

奈良時代

飛驒国分寺



時代

奈良時代

場所

高山市総和町1丁目94

現在の飛驒国分寺境内地は奈良時代の国分寺があった場所で、現境内地は東西70、南北92[㍎]、民地が入り組んでいて創建当時の寺域より、かなり狭まっていて、室町時代の国分寺本堂が建っている。昭和27～29年、国分寺本堂を解体修理する際に本堂下が発掘調査され、9個の礎石と根石を確認した。この遺構は4×7間規模の建物跡と推定され、金堂跡と推定されている。

昭和61年、境内北側に貯水槽を造る際、高山市教育委員会により発掘調査がなされ、現況表面から130～150[㍎]下に瓦片が出土した。この面が奈良時代の生活面であり、広範囲の河川氾濫により、奈良時代の遺構が埋まってしまったものと考えられている。

本堂東側に玉垣で囲われた塔心礎石（国指定史跡）が据えてあり、礎石本体は創建当時のものと推定される。ほぼ方形で、上面に円柱を据える座を造り出し、その中央部に円形の穴が明けられる。礎石の寸法は、径約2[㍎]四方、地上高さ約1[㍎]。しかし過去に東方向から西に移動されて、原位置を保っていない。

奈良時代国分寺の屋根瓦は、高山盆地の西方山麓にある「赤保木瓦窯」で焼かれており、軒丸瓦は5個の蓮子をもつ中房の周囲に細形単弁八葉の蓮花文を配し、外区に珠文帯をめぐらす。軒平瓦は、二重圈の中に左右対称の唐草文を配する。

西方の国分尼寺（辻ヶ森三社）と東西一直線に並び、この時代の条里型地割の痕跡も報告されていて、高山盆地における奈良時代の景観が知られる。



表門（県指定重要文化財）



本堂（国指定重要文化財）



飛騨国分寺大イチョウ
（国指定天然記念物）



鐘楼門と梵鐘
（市指定有形文化財）



三重塔
（県指定重要文化財）



三重塔 組物

15

飛騨国分尼寺

ひだこくぶんにし

奈良時代

飛騨国分尼寺



時代

奈良時代

場所

国分尼寺史跡広場：高山市岡本町2丁目130

奈良時代から10世紀後半頃まで飛騨国分尼寺が建てられていた場所である。昭和63年、辻ヶ森三社の社殿改築を機に発掘調査が実施され、飛騨国分尼寺金堂跡が発見された。規模は、基壇の大きさが正面幅110尺(32.78m)奥行66尺(19.67m)で、基壇上には桁行7間、梁間4間の礎石建物が建てられていた。飛騨国分寺の金堂寸法も、桁行7間、梁間4間と同じで、桁行の寸法も88尺と同じ大きさであることが分かり、両寺の強い関係が知られた。

敷地の形では南側正面1間分に壁が無く、床は石が敷かれ、この形態は、奈良の唐招提寺金堂の吹き放し廊下と同じ様式であった。また基壇の版築は高さ120cmで、非常に硬く叩きしめられ、版築の上に穴を掘って設けられた礎石は安定して水平を保ち、礎石間の高低が発掘時でも2～3cmの誤差であった。凍結厳しい高山でも版築構造による基壇が堅牢であることが知られた。遺物は、奈良時代から平安時代にかけての須恵器・灰釉陶器と瓦が出土し、灰釉陶器が基壇上の堆積土から出土、その年代から10世紀後半頃まで尼寺が存続していたと考えられている。

国分尼寺は全国的に見て、その位置や構造など詳しいことが分かっておらず、飛騨国分尼寺のように建物構造まで明らかになったのは珍しい。飛騨国における国分寺、国分尼寺の特定により、奈良時代において聖武天皇、持統天皇の悲願であった、諸国に国分寺、尼寺の位置が判明している。



辻が森三社 鳥居



辻が森三社 本殿



辻が森三社 拝殿



国分尼寺史跡広場



国分尼寺史跡広場と看板



国分尼寺史跡広場

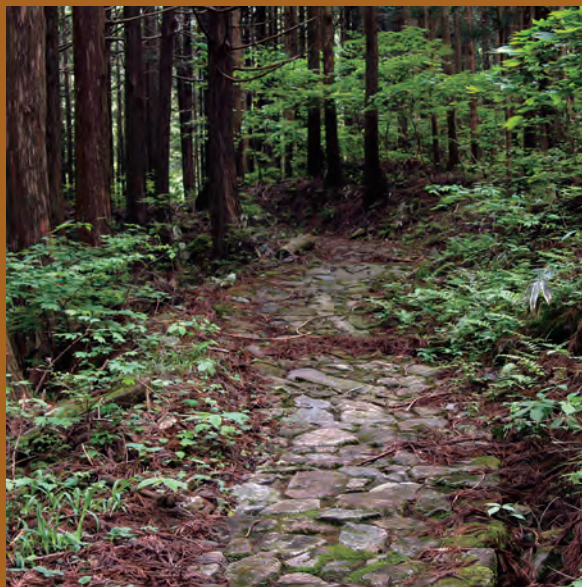
16

飛驒支路

ひだしろ

奈良時代

飛驒国分尼寺



時代

奈良，平安時代

場所

高山市一之宮町

日本国の道路が、国の制度の中に位置づけられたのは、大宝元年（701）制定の大宝律令できたとき。道路は7つ作られ、その1つである「東山道」は日本列島の背骨にあたる山地を通る道路であった。奈良から東北へと通ずる道路で政府の役人などが通るために整備された。古代の官道では、30里（この時代は約16km）を基準に駅家が設置されている。この七道は大、中、小路に分類され、東山道は中路で、各駅には馬10疋が置かれた。

この東山道は東へ進んでゆくと、美濃の方県付近で本道と分かれて「飛驒支路」となり、関～金山～下呂と北へ進んで飛驒国府の所在地であった現在の高山市へと続いた。戦略的に重要であったのか、わざわざ、飛驒へ通ずる道を官道としたのである。飛驒匠もこの道を通り、自己の食糧を持参したため上京15日程、帰りは荷が無いので8日程（延喜式主計上巻24参考）であった。

飛驒支路の中で、所々に石畳の残る位山道は匠街道とも呼ばれ、都から飛驒へと文化を伝え育んだ道でもあった。【飛驒支路、東山道の駅、その推定地】

高山発（東山道飛驒支路）⇒ 石浦駅 ⇒ 一之宮 ⇒ 上留駅・上呂 ⇒ 下留駅・下呂 ⇒ 初矢峠 ⇒ 乗政 ⇒ 夏焼 ⇒ 菅田駅・金山町菅田 ⇒ 袋坂峠 ⇒ 武儀駅・賀茂郡七宗町加淵 ⇒ 加茂駅・賀茂郡富加町 ⇒ 方県駅・長良辺り（ここから東山道）⇒ 大野駅・揖斐郡大野町 ⇒ 不破駅・濃国府・垂井 ⇒ 不破関 ⇒ 横川駅・米原市（ここから滋賀県）⇒ 鳥籠駅・彦根市 ⇒ 清水駅・東近江市 ⇒ 篠原駅・野洲市 ⇒ 守山 ⇒ 草津（東海道と合流）⇒ 近江国府 ⇒ 勢多駅・大津市 ⇒ 山科駅・山科 ⇒ 宇治 ⇒ 奈良



匠街道を示す看板(高山市一之宮町)



石畳の道



石畳の道



石畳の細い道



分水嶺



位山の解説とオブジェ